

2021（令和3）年度

武蔵大学 FD 活動報告書

武蔵大学ファカルティ・デベロップメント(FD)委員会

刊行にあたって

学長 山崎 哲哉

2021 年度も前年度に引き続き新型コロナウイルス感染症への対応に追われた年となった。国レベルでは、感染予防や重症化阻止の切り札となるワクチン接種が大幅に遅れ、高齢者の大半が2回目の接種を終えたのは7月中旬で、より若い世代の接種は秋にまで及んだ。こうしたなか東京 2020 オリンピックが7月下旬から8月上旬にかけて1年遅れで開催され、無観客試合となったが、この間も新型コロナウイルス感染症の感染拡大は続いた。第5波と呼ばれた感染のピークは8月下旬で東京 2020 パラリンピックが開催されていた期間にあたる。

本学においては、4月の新学期学科別ガイダンスのみ対面で実施できたが、それ以外はすべてオンラインとなり、6月下旬から7月にかけてようやく少人数授業を中心に対面授業を行うことができた。後学期も上述のように第5波の新型コロナウイルスの感染拡大が収まるまでの間、また学生のワクチン接種が一定程度進むまでの間、オンラインで実施し、10月中旬から少人数授業の多くを対面で実施することができた。新型コロナウイルスの感染拡大に備えて、大人数授業はあらかじめ6時限に配置しオンデマンド型のオンライン授業としていたため大きな混乱はなく、オンライン授業も2年目ということもあり、担当者がそれぞれに工夫を凝らして前年度に比べれば質の高い授業を提供できたと思う。授業評価アンケートの満足度等の集計結果の詳細は本報告書の該当箇所を参照されたい。FD 研修会や FD フォーラムなどの活動もオンラインで実施され、オンラインならではの特徴を生かした活動になったと思う。

大学運営という観点からみれば、2021 年度は第三次中期計画の最終年度にあたり、FD 活動を含め諸事業の総括を行う年であり、また、第四次中期計画策定の年でもあった。FD については委員会構成の見直しが行われ、より機動的な活動が行える体制を整え、全学的には国際教養学部の発足に向けて最後のギアを入れつつ、既存3学部のカリキュラム改編やアドミッションセンター、リベラルアーツアンドサイエンス教育センターの設置などを含む委員会制度の大幅な改革など、大学機構の新体制を整えた年となった。

新型コロナウイルス感染症は2021 年末からオミクロン株の拡大という新局面に突入し、1月にはまん延防止等重点措置が再発令され、過去最多の感染者数を更新するなど第6波の到来となった。本学でも学生や教職員の感染が毎日のように報告されたが、幸いにも重症化に至ったケースはなかった。

北京での冬季オリンピックが閉幕した直後にロシア軍がウクライナに侵攻し、コロナとは別次元の世界危機が到来しているなかこの巻頭言を書いている。第二次世界大戦が終結して 77 年。ヒトラーのポーランド侵攻から 83 年。人類の進歩とは何だったのか。ヨーロッパ東部で起きているプーチン政権の蛮行に対して私たちは何ができるのか。武蔵大学の FD 報告書で問うべき問題でないことは重々承知の上で、あえて記しておきたいと思う。

来年度から高橋新学長の体制のもとで、本学の FD 活動がより実りあるものとなることを祈念して巻頭言を結ぶことにしたい。

2021 年度も、2020 年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続き、緊急事態宣言の発出期間は4月 25 日から6月 20 日、そして7月 12 日から9月 30 日の2回にわたって合計 141 日に及び、まん延防止法特別措置も4月、6月、7月、そして年が改まった1月、2月、3月にそれぞれ発出されました。

大学運営としては、緊急事態宣言等発出前から大規模講義科目は授業期間を通じて原則として6時限にオンデマンド方式で実施するなどの措置を決定していました。しかしながら、結果として6月下旬から7月上旬の期間を除き、前学期はすべての授業が原則オンライン実施となり、後学期も開始当初から 10 月中旬までの期間及び1月中旬以降の期間は原則オンライン実施としました。

FD 活動も、そのような環境下で行われ、前年度同様に特殊事情を踏まえたものになりましたので、以下にそれぞれの活動内容の概要を報告します。

第1に、毎年度実施している「授業評価アンケート」は、前学期実施分について、本年度も特殊事情を配慮したものになりました。具体的には、対面授業とオンライン授業が同じ学期に実施されていることを踏まえた設問としました。ただし、回答率は著しく低い結果となっており、今後の課題となっています。

第2に、本年度の FD 研修会は、前年度に引き続き全教職員対象にオンラインで実施しました。2021 年 8月5日に、「コロナ禍のオンライン授業経験を次世代の大学づくりに活かす」というタイトルで、熊本大学教授システム学研究センターの鈴木克明教授に講師を依頼しました。

第3に、前年度、コロナ禍によって中止を余儀なくされた FD フォーラムを2年ぶりに 2021 年 12 月 23 日に実施しました。オンラインでの実施となりましたが、「『ゼミの武蔵』を考える:もし本気で三ヵ月以内に3つまで実現可能だとしたら、ゼミのどこを変えたいか?」という過去と比較すると、学生の本音に直接迫るようなテーマ設定を行い、3学部4学科6チームの学生から発表がありました。学生の発表後、小森真樹 FD 委員の進行によって学生と教職員が授業運営についての活発な意見交換を行いました。

第4に、2022 年度以降の FD 委員会の構成員を見直しました。FD 委員会は FD 研修会、FD フォーラム、授業評価アンケート、ベストティーチャー賞の選定、FD 報告書の作成などの従来から実施している活動に加え、昨今のコロナ禍も踏まえた ICT 化への取組み支援や義務化されたプレ FD など、機動的に動かなければならないことが増えました。そのため、従来構成員であった学部長と研究科委員長を常任の構成員から外し、委員会を機動的に開催できるように改めました。

第5に、内部質保証委員会からの検討依頼事項についての対応を行いました。まず、SA 及び TA の現状把握に関しては、専任教員に対してアンケート調査を実施し、さらに教授会を通して意見収集を行いました。その結果、SA や TA に関する業務内容の拡大、SA や TA の申請機会の拡充等を報告しました。また、ICT を活用した授業の導入については、2022 年度に ICT を活用した授業への支援を目的とした予算を計上し、2022 年度開講科目を対象に公募を行い、平時における ICT を活用した授業の導入に向け、検討を進めています。

最後に、FD 委員会の活動ではありませんが、本学の特色ある教育について、本報告書に掲載しています。一つはゼミ活動を中心とした取組みです。学部横断型課題解決プロジェクトは課題解決型の授業実践の事例であり、ゼミナール対抗研究発表大会(ゼミ大会)、卒業論文報告会、シャカリキフェスティバルは、

学部ごとの特徴を活かしつつ実施している学生の研究発表の機会となっています。

もう一つは、各学部における、それぞれ特色のある授業科目の紹介です。一前年度までは、グローバル化に対応する教育を中心に絞って紹介していたところですが、前年度からは、グローバル化に限定せず、各学部の FD 委員に選定を一任しました。

以上、簡単ではありますが、2021 年度の FD 委員会の主な活動を報告させていただきました。また、本報告書の最後には、会議記録、関連する事業報告書などを掲載しました。これらの記録を通じて本年度の本学の FD 活動の状況を理解していただくことができれば幸いです。